



教皇様の聲

1

237号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©2000

神の本質は無限の愛の神秘

（人間は洗礼を通して神との親子関係にあずかり、その時聖霊によって生命に御父の愛がもたらされる。）

1 前回のカテケージスで取り扱った「回心」は愛の掟を果たすことを目的とします。使徒的書簡「紀元2000年の到来」で示していますが、御父である神に捧げられた今年は、対神徳の中でも愛徳について強調するのにふさわしい年です。（50参照）

使徒ヨハネは次のように促します。「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」（1ヨハネ4・7～8）

この素晴らしい言葉は、神の本質が無限の愛の神秘であることを教えてくれます。同時にキリスト教徒の道徳的生活が、愛の掟に基づくものであることも示しています。人間は全く献身して神を愛するよう求められており、また、神ご自身の愛によって導かれながら、愛情をこめて兄弟姉妹に語りかけることも必要です。回心とは愛する心を持つ人になることです。

すでに旧約聖書で、愛の掟を実現するための秘められた原動力が、イスラエルと神との契約に見られます。まず神から愛が示され、それからイスラエルが神の期待に沿って愛を持って応えます。神がイスラエルに愛を示された理由が、例えば申命記で次のように示されています。「主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただあなたに対する主の愛のゆえである。」（申命記7・7～8）イスラエルの信心生活全体を導く基本的な掟は、この特別なまったく無償の愛に一致するものです。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」（同上6・5）

イエスの従順を真似ることによって御父の愛を知る

2 愛である神は近くにおられ、歴史に働きかけられます。神はモーセにご自分の名前をお示しに

なりますが、それは、出エジプトを成功させるために神が愛をもって助けてくださることをモーセに確信させるためでした。この愛の助けは永遠に続くものとなります。（出エジプト3・15参照）預言者の言葉を通して、神は絶え間なくこの愛の助けを人々に思い起こさせます。「主はこう言われる。民の中で、剣を免れた者は 荒れ野で恵みを受ける イスラエルが安住の地に向かうときに。遠くから、主はわたしに現れた。わたしは、とこしえの愛をもってあなたを愛し変わることなく慈しみを注ぐ。」（エレミア31・2～3）

神の愛は計り知れない愛情の音色を帯び（ホセア11・8以下、エレミア31・20参照）普通は父親のイメージで示されますが、時には婚礼になぞらえて表されています。「わたしは、あなたととこしえの契りを結ぶ。正義と公平を与え、慈しみ憐れむ。」（ホセア2・19；18～25節参照）

人間が契約を何度破っても、神はその愛を進んでお示しになり、無条件に与えられる掟を受け入れられるよう、人間に新しい心をお与えになります。エレミアの預言を見てみましょう。「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。」（エレミア31・33）エゼキエルにも示されています。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。」（エゼキエル36・26）

3 新約聖書では、この強い愛が御父の愛する御子イエスに集中し、イエスを通して表れます。（ヨハネ3・35；5・20；10・17参照）、御父はイエスを通してご自分をお示しになるので、人間は御子を知ることによって、つまりその教えやあがないのみわざを受け入れることによって、神の愛にあずかります。

わたしたちは御父の掟を守り続けた御子を真似ることによってのみ御父の愛に至ることができます。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなた

がたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」（同上15・9～10）このようにして私たちも御子が知っている御父について知ることができます。「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」（同上15節）

4 愛によって私たちは、御子における子となります。完全にイエスの子としての生き方に導かれます。「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです。」（1ヨハネ3・1）愛は生活を変え、御父についての知識を深めさせ、最後には聖パウロの言う完全な知識にまで至ります。「わたしは今一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」（1コリント13・12）

神の愛から私たちを引き離すものは何もない

知識と愛の関係を強調することは大切です。キリスト教は人々を回心へ導こうとしますが、回心こそまさに神を体験することです。このことは特に最後

の晩餐で、イエスが司祭として祈る時お示しになります。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」（ヨハネ17・3）もちろん神を知ることには知的な面も含まれますが（ローマ1・19～20参照）、御父や御子の生きた体験は愛を通して、最終的には聖霊によって実現します。「聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」（ローマ5・5）からです。

慰め主である聖霊を通して、神の父としての愛情に触れることができます。さらに、聖霊が私たちの中に現存することによって、深い慰めが得られます。神が永遠に限りなく人間を愛して下さり、決して私たちをお見捨てにならないことをはっきりと確信できるようになるのです。このことによって私たちは最も励まされるのです。「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。…わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（同上8・35、38～39）愛し理解することができる新しい心は、永遠に愛である神と一致して鼓動を刻んで行くことになります。

（1999・10・6）

諸宗教との対話

〔キリスト信者が、イエス・キリストにおける神の完全な啓示を証言するなら、他宗教と霊的な豊かさを分かち合うことができる。〕

1 使徒行録では、アテネ人への聖パウロの説教が触れられますが、それは、現代における宗教の多元的共存について考えるのに、とてもふさわしいものに思われます。イエス・キリストの神を示すために、聴衆の宗教心について語り始め、たたえます。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなた方が信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。道を歩きながら、あなた方が拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなた方が知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。」（使徒行録17・22～23）

私が世界を巡り、その霊的司牧的巡礼で繰り返していること、教会は様々な人々の宗教

において「真実で聖なるものはなんであれ」尊重するということです。また、私は公会議に従って常に付け加えてきました。キリスト教の真理は「他宗教の人々のもとに見いだされる精神的、道徳的富および社会的、文化的価値を認め、促進する」（「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての教令」2）の役に立つ。神の普遍的な父性は、イエス・キリストにおいて示されましたが、アブラハムの家系以外の宗教との対話を促します。例えば、宗教的精神が浸透したアジアの文化や、アフリカの伝統的宗教といったものが、多くの民族の知恵と生活の源であることを考えると、他宗教との対話にはたくさんのテーマと挑戦が待っていることがわかります。

他宗教とのキリスト教的対話には様々な形がある

2 諸宗教と教会との間には根本的な接点があります。諸宗教の根底には、救い主である神の秘義

「神の子として生きる」（新刊） フェルナンド・オカリス、イグナシオ・デ・セラヤ共著 本体価格一五〇〇円
「すべての人が聖性と使徒職に召されている」という教会の教えを実現するためのカギとなるのは神の子としての自覚を保ち毎日の生活で神様と親しく付き合うことです。本書は、この「神の子としての精神」を分かりやすく説明し、日常生活の心の糧を与えてくれます。

を知ろうとする方法や人間の最終的な状態を求める態度が必ず見受けられます。実際どのような宗教でも、救いを求め、救いに至る道を示しています。（「カトリック教会のカテキズム」843参照）対話が前提としているのは、神の似姿として創造された人間もまた救いにあずかる特権的「立場」にいるという確信です。

神をあがめ、そして認めること、神の賜物に対する感謝や御助けを願う祈りは、特別な出会いの形でもあります。たとえ神の父性を見つけていなくとも、特に「いわば、腕を天に向けて伸ばしている」（パウロ6世、「福音宣教」53）状態にある宗教とは特別な出会いの形となります。しかしながら、現代の宗教的確信の中でも、救いを求める代わりに、祈りが人間の可能性を高めるにとどまる宗教とは対話が難しくなります。

3 キリスト教と他宗教との対話は様々な形を取り、いろいろな段階で行われますが、次のような「生活の対話」から始まります。「喜びと悲しみ、人間としての問題や心配を分かち合いながら、人々が開かれた心で隣人として生活するよう努めること」（「対話と宣言」42）です。

「行動の対話」は特に重要です。なすべきことの中でも特に大切なのは、平和教育、環境への配慮、苦しむ世界との連帯、社会正義の促進、そして諸国民の全体的な発展です。国境を知らないキリスト教的な愛は、他宗教の人々が行う善を喜び、他宗教の人々と共に愛徳の証人となることを望みます。

それから、「神学的対話」があります。神学的対話では、専門家がそれぞれの宗教的遺産の理解を深め、互いに相手の様々な霊的価値を評価するよう努めます。しかしながら、様々な宗教の専門家との会議では、最低限共通する特徴を求めるだけにとどめることはできません。目的は、基本的に異なる部分と、一致できる部分に明るい光を当て、勇気をもって真理に仕えられるようになることです。その際、偏見や誤解を克服するために、誠実な努力が必要です。

4 「宗教的体験の対話」もまた、大変重要になってきています。内的生活に大変な渇きを感じる人々は、瞑想によって満たされ、信じる人々は、より深く神の秘義に入っていくことができます。偉大な東洋の宗教が行うことの中には、現代人を魅了するものがあります。しかし、キリスト者はその点において霊的識別力を働かせ、救いの歴史を通して聖書が教える祈りとは何であるかを見失わないようにしなければなりません。（「キリスト教の黙想に関する若干の考察」参照）

教会は敬虔な人々と共に巡礼の旅をする

識別力が必要だと言っても、宗教間の対話を妨げることにはなりません。実際、何年もの間に、諸宗教の修道生活を営む人々と出会い、心からの友情を結んできました。そして、「祈り、瞑想、信仰、神あるいは絶対者を探求する方法などに関する」（「対話と宣言」42）霊的な宝を互いに分かち合う道を開いています。しかし、それぞれの宗教の価値を同じように尊重するといっても、神の秘義、つまり歴史における神の啓示をなおざりにするようなことがあってはなりません。キリストの弟子である私たちは、ヨハネの福音書にあるように、神はキリストにおいて御自分を啓示されたという事実の証人となるべきであり、その喜びを持つべきなのです。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」（ヨハネ1・18）

この証言は無条件に与えられなければなりません。しかし、キリストと聖霊の働きは、それぞれの宗教の信念に従って誠実に生きる人々の中に、常に神秘的に存在するという事柄も知っておくべきです。そして教会は、心から敬虔な全ての人々とともに、歴史を通して、栄光に輝く神を黙想するために巡礼を続けるのです。

(1999・5・19)

カタコンベで信仰と愛を学ぶ

〔教皇様は美術・史料保存委員会会議のメンバーにお話しになった。会議は全員参加で行なわれる。教皇様は、大聖年に多くの巡礼者が訪れることができるよう、ローマにあるたくさんのカタコンベが修復されていることを称賛された。〕

兄弟姉妹の皆さん、

1 美術・史料保存委員会会議で、全員が参加するこの機会に皆さんにお会いできたことをうれし

く思っています。皆さん一人一人を心からお迎えし、特に、自分の思いを伝えて、「カタコンベと大聖年」をテーマに重要な仕事を行なっている大司教フランチェスコ・マルキサーノに感謝します。

まず初めに、大聖年を目指してさらに熱心に行われている、皆さんの多大な貢献に感謝したいと思います。大聖年のためのプロジェクトと同様、考古学的な諸発見や修復事業にも感謝します。しばしば強調されてきたカタコンベは、二千年の祝典でも重要な役割を

果たすことになるでしょう。

2 皆さんは、イタリア各地に散らばるカタコンベの修復や準備に長年携わってこられました。特に、聖カリスト、聖セバスチアノ、ドミティラ、プリシラ、そして聖アグネスなどローマで一般公開されているカタコンベの管理に従事され、巡礼者が訪れ易いようにという配慮が見られます。さらに、より多くの墓地を訪れることができるように、第六番目のカタコンベであるカシリナ通りの聖ペトロとマルチノの墓を公開するための計画が進められています。

皆さんは、キリスト教の古代遺物を訪れる人々が霊的に高められることを願っていらっしゃるでしょう。最終的には巡礼案内書が用意されます。最新の細かい説明を載せた有益な科学的霊的案内書があれば、訪れる人々にとって効果的なカテケージスとなり、巡礼者が福音書のメッセージを深く味わうこともできるでしょう。全ての教会は第三の千年期に向かって「新福音化」の計画を推し進めています。それは、初代キリスト教徒が眠る古代の墓地を通して私たちが原点に戻ることに完全に一致するものです。

3 カタコンベは、初めの数世紀にキリスト教徒の生活がどのようなものであったか雄弁に物語っています。カタコンベは同時に、信仰・希望・愛を絶え間なく教えてくれます。

カタコンベのトンネルを歩いて行くと、そこには感動を呼び起こす何かがあり、当時の様子に思いをはせます。無数に連なった簡素な墓には死者の洗礼名が刻まれています。刻まれた名前を通り抜けていると、終末論的な呼びかけに応えるたくさんの声が聞こえてくるように思えます。そして、ラクタンチオの言葉が思い出されます。「私たちの間には召使いも主人もない。私たちは皆同等であり、兄弟と呼び合う理由もない。」(Divinae Instit.,5:15)

カタコンベには、信仰によってつながれた兄弟姉妹の一致が表されています。全ての死者はそこで埋葬されることができました。墓を購入する余裕がなく、死者のために準備を整えることもできないような貧しい人々も例外ではありませんでした。このような信者間の愛徳は、初代キリスト教共同体の特徴の一つであり、昔の宗教に戻るといふ誘惑からキリスト教徒を守ることにもなりました。

4 したがってカタコンベを訪れる巡礼者は、信仰と希望に結ばれた堅い絆を感じることができる

でしょう。本来、眠る場所を意味する「チェメテリア」の定義は、まさにカタコンベが共同体のための永眠の場所であったことを適切に表しています。そこでは地位や職業に関係なく、亡くなった全てのキリスト教徒が一致の中で眠り、復活を待つのです。ですから、カタコンベは悲しみの場所ではありません。暗い曲がりくねった道を照らすかのようにフレスコ画やモザイク、彫刻で飾られ、花や鳥、木を描き、人々はそこで死後の楽園を待ち望むのでした。キリスト教徒の墓に刻まれるin pace(イン・パーチェ)「平和のうちに」という大切な決まり文句には彼らの希望も要約されています。

墓に見られるシンボルは、深い意味を持つと同時に単純なものでもあります。シンボルである錨・船・魚はキリストにおける確固とした信仰を表しています。キリスト教徒の生涯は、嵐の海を通して思い焦がれる永遠の天国を目指す航海のようです。魚はキリストを表し、洗礼を暗示させます。テルトゥリアヌスは信者を、水の中に生まれ水中に留まることによって生きることができる魚と比べています。(「洗礼について」1・3)

5 カタコンベには最初の殉教者たちの墓もあります。殉教者ははっきりと不動な信仰を証しし、最大の試練に打ち勝つ「神のスポーツマン」となりました。殉教者の墓は今でも多く残っており、幾世代もの信者たちが墓の前で祈りを捧げてきました。大聖年に訪れる巡礼者たちも殉教者の墓を訪れ、古代の信仰の勝利者に祈りを捧げることでしょう。そして、巡礼者は現代の「新しい殉教者」に思いを向けることでしょう。今もなお、キリストと福音に忠実であろうとして暴力や虐待、誤解に遭う人々がいます。

二千年に訪れる巡礼者たちは、カタコンベの静けさの中で自らの信仰を再確認し、信仰をさらに深めることができるでしょう。最初の信仰の証しに始まる霊の旅路において、新たな福音化とその必要性を納得することになります。

すでによくご存じのことだとは思いますが、今日お話ししたことが教会や文化に奉仕する皆さんの支えになることを願っています。いとも聖なるマリアの愛すべき御助けを受けることができるよう心から祈りを捧げ、皆さんと皆さんの愛する人々のために特別な祝福を添えて、終わりにしたいと思います。

(1999・1・16)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

キリストの生活の秘義

（今回は「カトリック教会のカテキズム」第三段落から、特に降誕節に関係のある箇所を試訳でお届けします。）

キリストの生活の秘義

512 使徒信経は、キリストの生涯については、ご託身の秘義（受胎と誕生）と過越しの秘義（ご受難、十字架刑、ご死去、埋葬、古聖所への降下、ご復活、ご昇天）以外には何も言及しない。使徒信経は、イエスの私生活と公生活について直接には何も語らない。しかし、ご託身と過越しに関する信仰箇条はキリストの地上での生活のすべてを照らしている。「イエスが行い、また教え始めてから、・・天に上げられた日までのすべてのこと」（使徒行録1・1-2）は、誕生と過越しの秘義の光に照らして考察されなければならない。

513 要理教育は、状況に応じて、イエスの秘義のすべての豊かさを示すべきである。本書では、まず (I) キリストの生涯のすべての秘義に共通する要素をいくらか示し、続いて (II) イエスの隠れた生活の主要な秘義と、(III) 公生活の主な秘義を解説する。

I キリストの全生涯は秘義である

514 福音書には、イエスに関することで、人の興味をそそる多くのことが出て来ない。そのナザレトでの生活についてはほとんど言及がなく、公生活の出来事でさえ少なからぬことが沈黙に包まれている（ヨハネ20・30参照）。福音書に記されていることは、「イエスが神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名によって命を受けるため」（ヨハネ20・31）に書かれたのである。

515 福音書は、イエスを最初に信じた弟子のグループに属し（マルコ1・1；ヨハネ21・24参照）、また信仰を他の人々と分かち合いたいと望んでいた者たちによって書かれた。イエスが誰であるかを信仰によって知った彼らは、イエスの地上での全生涯にわたる秘義の特徴を自分で見、また他人に見せることができた。生まれたばかりのイエスを包んだ布（ルカ2・7）から、受難のときになめさせられた酢（マテオ27・48参照）や復活のときの汗拭き布（ヨハネ20・7参照）にいたるまで、地上でのイエスの生涯に関係するすべてのものが、その秘義の理解に鍵を与える。イエスは、自分の振舞いや奇跡や言葉を通じて、「自己のうちに、満ち溢れる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っている」（コロサイ2・9）ことを教えた。イエスの人性は、いわば「秘跡」のようなものである。なぜなら、自らがもたらした救いと神性とを表すしるしであり道具であるから。この地上での主の生活の見える部分は、彼が神の子であることと、その贖いの使命という見えない秘義に我々を導く。

イエスの秘義の共通の特徴

516 キリストの全生涯、すなわちその言葉と行い、沈黙と苦しみ、生き方と話し方などは、御父を啓示している。イエスは、「私を見た者は、父を見た」（ヨハネ1・9）と言い切り、御父は「これは私の子、選ばれた者。これに聞け」（ルカ9・35）と命じられた。我らの主は、御父の御旨を果す者

となられた（ヘブライ10・5-7参照）ために、その秘義の最も些細なことによってさえ、「神の愛を私たちに示された」（1ヨハネ4・9）。

517 キリストの全生涯は贖いの秘義である。贖いは、何よりも十字架上で流された血によって成就したが（エフェソ1・7；コロサイ1・13-14；1ペトロ1・18-19参照）、キリストの全生涯にわたって実現された。たとえば、早くも託身において、貧しく生まれることによって我々を富まして下さった（2コリント8・9参照）。ナザレトの隠れた生活においては、両親に従うことによって（ルカ2・51参照）、我々の不従順を償われた。その言葉によって聞く人を浄化し、病気を治し悪魔を追い出すことによって、「私たちの患いを負い、私たちの病を担った」（マテオ8・17；イザヤ53・4参照）。そして復活によって、私たちが義とされた（ローマ4・25参照）。

518 キリストの全生涯は、復興である。イエスのすべての言葉と行ないは、罪に墮した人間を原初の状態に戻すことを目的としていた。

キリストは、人となられたとき、人類の長い歴史をご自分において立て直し、我々に救いへの近道を開いて下さった。その結果、我々はアダムにおいて失ったもの、すなわち神の似姿であることを、キリスト・イエスにおいて回復する（聖イレネオ「異端論駁」、3,18,1）。他方、キリストは人間のあらゆる段階を生きられたが、それはあらゆる人間に神との交わりを回復するためであった（同,3,18,7。また2,22,4参照）。

イエスの秘義と人間

519 キリストの富のすべては、「全人類と人間のひとりひとりのため」である（ヨハネ・パウロ2世回勅、「人類の贖い主」、11）。キリストは、「我ら人類のため、また我らの救いのために」お生まれになったときから、「我らの罪のために」死ぬ（1コリント15・3）瞬間まで、そして人間を義とするために復活されるときも（ローマ4・25）、自分のためにではなく私たちが人間のために生きた。現在でも、主は「御父のもとにいる弁護者」（1ヨハネ2・1）で、「常に生きていて、人々のために執り成しておられる」（ヘブライ7・25）。私たちのために生きた生涯と苦しみすべてをもって、永遠に「私たちのために神の御前に現れてくださったのです」（ヘブライ9・24）。

520 イエスは全生涯を通じて、私たちの模範となった（ローマ15・5；フィリピ2・5参照）。彼は、「完全な人間」（現代世界憲章、38）であり、私たちに弟子となりつき従うように招いておられる。ご自分を空しくすることで、まねるべき模範をお与えになり（ヨハネ13・15参照）、ご自分の祈りによって、私たちが祈りに導き（ルカ11・1参照）、貧しい生活によって、貧しさや迫害を進んで受けるようにお呼びになった（マテオ5・11-12参照）。

521 キリストが生きたすべてのことは、私たちが彼において生き、彼が私たちの中に生きることを可能にした。「神の子は受肉によって、ある意味で自分自身をすべての人間と一致させた」（現代世界憲章、22,2）。私たちは、ただ彼と一体になることのために呼ばれているのである。私たちがその神秘体の一員として、主が私たちのために私たちの模範として人間として生きたことすべてに参加できるようにして下さい

る。：我々は、イエスの秘義と生活を我々の中に続け、完成し、またそれが我々と全教会において実現し完成されるようにしばしば祈らなければならない。・・神の子は、ご自分の秘義を我々と全教会において発展させ続けるという計画をもっておられる。そのために、恩恵を我々に与え、これらの秘義によって我々を動かそうと望まれる(聖ヨハネ・ユード、「イエスの国」)。

II イエスの幼年期と隠れた生活の秘義

準備

522 神の子の来臨は、最重要事であったので、神は何世紀にわたってその準備をすることを望まれた。「最初の契約」(ヘブライ9・15)の時代の儀式と犠牲、また前表と象徴のすべてを、キリストに流れ込むようにさせ、キリストの来臨をイスラエルに次々に出現した預言者によって予言させた。そればかりか、異邦人の間にも、まだ淡いものではあるが、救い主の到来を期待する気持ちを起こさせた。

523 洗者聖ヨハネは、主の道を準備するために送られた直前の先駆者(使徒行録13・24参照)であり、最後の預言者であり(マテオ11・13参照)、すべての預言者を越えるもの(ルカ7・26参照)で、福音の時代の幕を開けた(使徒行録1・22;ルカ16・16参照)。母の胎内からキリストの到来を祝い(ルカ1・41参照)、主を「世の罪を除く神の子羊」(ヨハネ1・29)として紹介し、自分は喜んで「花婿の友人」(ヨハネ3・29)の地位にとどまった。「エリアの霊と力をもって」(ルカ1・17)イエスの露払いをし、説教と改心の洗礼、そして最後に殉教によって、イエスの証をした(マルコ6・17-29参照)。

524 教会は、毎年待降節の典礼を祝うとき、何世紀にもわたってメシアを待ち望んでいたイスラエルを思い出させる。信者は、救い主の第一回の到来の待望を体験することによって、第二の来臨の熱望を新たにするのである(黙示録22・17参照)。教会は、先駆者の誕生と殉教を祝いながら、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(ヨハネ3・30)という彼の望みに一致する。

降誕の秘義

525 イエスは、貧しい家族の中で、そして馬小屋の謙遜の中で生まれた(ルカ2・6-7参照)。素朴な羊飼いの何人かが、この出来事に初めて立ち会った。この貧しさの中で、天の栄光が輝く(ルカ2・8-10参照)。教会は、この夜の栄光を歌ってやまない。：今日処女が永遠の御者を生む。この地はやんごとなきお方に洞窟を差し出す。天使と羊飼いたちが彼を褒めたたえ、博士たちは星とともに行進する。なぜなら、永遠の神よ、あなたが私たちのために小さい赤ちゃんとなって生まれたからである。

526 神の御前で「子供になる」ことは、天の国に入るための条件である(マテオ18・3-4参照)。そのためには、自らを低くし(マテオ23・12参照)、小さい者にならなければならない。いやそれだけではない。「神の子となる」(ヨハネ1・12)ためには、「上から生まれ」(同3・7)、「神から生まれること」(同1・13)が必要である。降誕の秘義は、我々の

中にキリストが「形づくられる」(ガラチア4・19)とくに、我々の中で実現する。降誕は、この「驚嘆すべき交換」の秘義である。：驚くべき交換よ。人類を創造された主が、体と靈魂を取り、処女からお生まれになった。男の干渉なしに人になり、人間をご自分の神性にあずからせて下さった(聖務日祷、降誕祭の交誦)。

イエスの幼年期の秘義

527 イエスは、誕生から1週間後に割礼をお受けになった(ルカ2・21参照)が、このことは次のことを意味する。イエスがアブラハムの子孫、契約の民に組み入れられたこと、また自らは律法の下にあり(ガラチア4・4参照)、一生を通じて参加することになるイスラエルの祭儀に自己を奉獻したことを意味する。このしるしは、「キリストにおける割礼」、すなわち洗礼(コロサイ2・11-13)の前表である。

528 御公現によって、イエスは自らをイスラエルのメシア、神の子、この世の救い主として現された。ヨルダン川での洗礼のときとカナの婚宴のときにも、主はこのように自らを現されたが、御公現の大祝日は東からやって来た「博士たち」がイエスを礼拝したこと(マテオ2・1)を祝う。福音書は、近隣の民族の宗教的指導者である博士たちに、降誕によってもたらされた救いの良い知らせを受け入れる国々の初物を見た。「ユダヤ人の王を拝む」(マテオ2・2)ためにエルサレムに来た博士たちは、自分達がダビデの星(民数記24・17;黙示録22・16参照)のメシア的輝きに導かれて、諸国民の王となるべき(民数記24・17-19参照)お方をイスラエルに探しに来たと言った。彼らの来訪は、異邦人がイエスを見つけ彼を神の子、救い主として拝みなければ、ユダヤ人のもとに来て(ヨハネ4・22参照)、彼らから旧約聖書に記されたメシアの約束を受ける必要があることを意味する(マテオ2・4-6参照)。御公現は、「無数の異邦人が太祖たちの家族に入り」(大聖レオ、「説教」,23)、「イスラエルの特権」(ミサ典書、復活徹夜祭：第3朗読の後の祈り)を獲得することを示している。

529 イエスの神殿での奉獻(ルカ2・22-39参照)において、イエスは神に属する長男(出エジプト13・2,12-13参照)として示される。そこでは、シメオンとアナとともに、全イスラエルが救い主と出会う(ビザンツの伝統では、この出来事を「出会い」と呼ぶ)。イエスは、待ちに待たれたメシア、「諸国民の光」、「イスラエルの光」として、しかし同時に「逆らいのしるしとして認められる。マリアの心が剣で刺し貫かれるという言葉によって、もう一つの奉獻、すなわち十字架上的の唯一で完全な奉獻が予言された。この奉獻こそ、神が「すべての民族」に準備した救いをもたらすであろう。

530 エジプトへの逃避行と幼児の虐殺(マテオ2・13-18参照)は、光に反抗する闇の姿を現す。「ご自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった」(ヨハネ1・11)。キリストの一生には、迫害の陰が付きまとう。主の弟子も同じ目に遭うであろう(ヨハネ15・20参照)。主のエジプトからの帰還は、出エジプトを思い起こさせ(ホセア11・1参照)、イエスを最終的な解放者として示している。